



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	琉球舞踊にみる服飾表現 - 「諸屯」, 「花風」をとおして -
Author(s)	富士栄, 登美子
Citation	日本衣服学会誌, 42(3): 49-55
Issue Date	1999-03-31
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2235
Rights	

ノート

琉球舞踊にみる服飾表現
—「諸^{しゅどん}屯^{はなふう}」, 「花風」をとおして—

琉球大学教育学部 富士栄 登美子

Costume Expression in Ryukyuan Culture
—Regarding Ryukyuan Dancing Costumes—

Tomiko Fujie

*Home Econ., Fac. of Educ., Univ. of the Ryukyus
1 Senbaru, Nishihara, Okinawa, 903-0213, Japan*

Abstract

The Costumes in this research are not clothes over hangers but those worn by dancers or performers on special occasions and for particular purposes. I am sure that costumes are significant for ritual dancing and dramas. In this sense, costumes can be regarded as part of expression of human hearts and feelings. And human beings by nature seek for beauty depicted in bright color and artistic design. The beauty of Ryukyuan costumes worn by traditional dancers is represented by color and design.

In the present study, I would like to examine the relationship between Ryukyuan dances and designated costumes of 'Bingata' and other colorful designs and patterns.

Ryukyuan dances are classified into two types: classical and popular dances. I will take up a classical dance, 'Shudun' and a popular dance, 'Hanafu'. Also, I will investigate the traditional combination of costumes and colors: for instance, Why is 'Nagasahaji' of a violet color? and Why is a red camellia put in the forelock of a dancer?

(Received Mar. 2, 1998)

(Accepted for Publication Mar. 17, 1999)

Key Words: costume expression 服飾表現, ryukyuan dance 琉球舞踊, ryukyuan song 琉歌,
the esthetics of the ryukyuan costume 琉球衣装の美学, color and design 色と文様,
camellia つばき

1. 緒 言

沖縄は、かつて1372年～1866年まで、中国と冊封関係にあり、「琉球王国」として独立していた。また、中国からの使いを冊封使といい、国賓としてのもてなしが為され、そのひとつに、御冠船踊りがあった。冊封使の乗る船を、王冠をのせた船というので御冠船と呼んだところから、その名がある。これが、琉球舞踊のはじまりといわれている。

琉球の人々は、海の向こうにはニライ・カナイという理想郷があり、五穀豊穡はそこからもたらされると信じていた。海の向こうである中国、日本、タイ、マレーシアなどとの交流は盛んであった。その中で、他国の異文化を吸収しながらも、独自の美学で、琉球文化をつくり出し、人々の思いを今日に伝えてきたのである。服飾にも、それは表れている。

本研究での服飾は、衣紋にかけられた衣服ではなく、感情の入った人々が身につけた衣装である。

服飾を心の表現と捉え、それらを考察し、理解することにより人々の心を知ろうとした。

美への要求は、人間本来の要求である。しかし、服飾美は単に、文様や色彩によって表現されているのではない。装う人の感情や、踊り手の気分が、観る者へと伝わるのである。そして、そのときの感情は何より琉歌にある。うたの意味するところを踊り手は感じとり、服飾もその意味するところを文様や色彩で表現しようとする。そして、音と光と温度と空気で作られた空間の中でそれらを実現する。総合的に実現した感情が移入されて文化が確立するものと考えられる。

本研究では、琉球舞踊に用いられる衣装の中から2例を取り上げ、考察した。

2. 研究方法

衣服の内面を知ろうとするとき、その時代に生きた人々の心を知る手がかりは、文学であったり、音楽であったり、舞踊であったりする。すなわち、その時代の文化の中にある。本研究では、舞踊へのアプローチを試みようとしている。

琉球舞踊には、古典踊りと雑踊りがある。1879年の廃藩置県後、庶民の暮らしの美と情意を表現した雑踊りは、古典踊りにみられるような抑制された美の表現とは対照的に、開放感に満ちた明るい躍動美となって庶民の心に新鮮な感動を与えたものであった。

今回は、雑踊りの一例として「花風」を、古典舞踊の一例として古典女踊りの「諸屯」を取り上げる。

人々の思いを知るには、琉歌の意味を理解しなければならない。琉歌は和歌と違い、八八八六音の叙情詩を入羽、中踊、出羽の3部構成に合わせてうたう。また踊り手は、そのうたの意味するところを舞うのである。なお、踊り手の気分を理解するためには、それらの衣装を着けて踊ってみることも必要である。

舞踊の衣装をみていて、次のような疑問が湧いてきた。

- (1) 紫の長巾と助六のはちまきとの関連
- (2) なぜ紫なのか。
- (3) 紅型の「松にかかる藤」の文様は、何を意味するのか。
- (4) かむろの飾りの前花に、亜熱帯気候の土地には多くは分布していない椿を何故使うのか。こうしたいくつかの疑問から、文献調査による方法を試みた。

3. 結果および考察

琉球舞踊をみると、琉歌の意味がわからずとも、その悲哀の感情は、伝わってくるものではある。しかし、その意味するところを知って後は、より一層理解することができ、その表現しようとする心に浸ることができるようになる。

即ち、感情表現において、色彩のもつ意味は大きい。近代的な感覚をもった、その時代の沖縄の色は確かにある。一方で、舞踊衣装など、色彩に意味をもつようになると、ひとつの型や様式となって固定化され、その色でなければならぬものとなる。色彩の気分象徴である。このことは、同様に文様についてもいえる。

この気分象徴が媒体となって、踊り手がいったん、衣装を身体に装着すると、見る側も、踊り手もその気分になりきることができるのである。

琉球舞踊は、衣装、その着付け、踊り、琉髪それぞれが、独自の匂いを創り出し、高度な表現力と品格を必要としているのである。

3.1 「花風」(図1)

はじめに、雑踊りの「花風」を例にして、色彩や文様の意味するところを考察してみる。「花風」は以下の要素で構成される。

- (1) 衣装：深く染め上げた紺地の琉球絣
- (2) 演出小道具：花染手巾、藍傘、白足袋
- (3) 髪：からじ結び
- (4) 琉歌：

三重城に登て 手さじ持上げれば
早船の習や 一目で見ゆる (花風)
朝夕さも御側 拝み馴れ染めて
里や旅せめて いきやす待ちゆが
(述懐節)

以下、琉歌の解釈は、宜保栄治郎解説監修の「琉球舞踊」から引用する。

「花風：愛しいひとを見送るために三重城の丘に上り、花染手巾をそっと振ったのですが、早船の常でしょうか。あの方を乗せた船はもうすでに走り去って遠く見えなくなってしまいました。

述懐節(下出し)：朝に夕にお側にいて、深く慣れ親しんだあなたを旅立たせて、わたしはどんな思いでお待ちすればいいのでしょうか。」²⁾

踊り手もうたい手も、この感情や思いを踊り、うたうのである。

「花風」の花は遊女を意味する。庶民の踊りとしての雑踊りではあるが、古典女踊りの伝統美を形式として受け継いでいる。

琉球舞踊の特徴と美しさを適格に表現している文に小林秀雄の「踊り」がある。その中に、次の一節がある。

「旅行すると、よくその土地の郷土舞踊というものを見せて貰うが、そう面白いと思った事はない。沖縄の舞踊も、ただ漠然とした気持で見ていたのだが、ある女性が、「花風」というのを舞うのを見

ていて、ひどく感動してしまった。情人を船で海に送り出し、独りになって寂しい、と傘を手にして非常に静かに舞う。その姿には、例えば、徳川の極く初期の風俗画に描かれている女性の、はっきりした強い線が動くような感覚があって、私が見慣れている、この種の日本舞踊に、いつも附纏っている、料を作った曖昧な情感を、きれいきっぱりと捨てたものがあった。女は、殆ど直立して舞い、感情は、気持ちよりリズムで動く白足袋の足にこめられた様子であった^(a)。その動きは、繰返し、不思議な形できまる。真っ直ぐにした片足が、斜めにスイッと出て、踵で舞台を、トンと突くようにして、足の裏を反らせる形で、繰返しきまる^(b)。それが、いかにも美しかった。」³⁾

下線部(a)：諦観である。上半身は、下半身に付随するように静かに動く。まさに、感情は足にこめられているのである。このときの足袋は、白である。足袋裏をみせない足の運びなど下半身の動きで決まる。感情をあらわにしない、極限にまで抑えた所作が、かえって見事に感情を表現することができるのである。

下線部(b)：女立ちと呼ばれる所作で、琉球舞踊の基本でもあり、琉球独自の美を醸し出しているといえる。ガマク(腰)を入れ、片方の足を斜めに出してできあがるアシンメトリーの美は、優しさを表わす。安定しているように見えるが、実は、非常に不安定で、もろい女性の弱さを表現している。

このように、「花風」に見られる色彩や衣装による気分象徴を具体的に記すと以下のようになる。

3.1.1 題材：題材は遊女だが、小林秀雄をして感動させた清潔さと気品が感じられる。

3.1.2 着装：深く染め上げた紺地の琉球絣をウシンチーという帯を使わない着付けをし、遊女の艶っぽさが品よく表現されている。帯を用いない着装は、風土によるところが大きい。大陸の影響を受けながらも、亜熱帯には亜熱帯の着装があり、そこに独自の文化が生まれ、美が成立するのである。

3.1.3 鮮やかな花染手巾：花染手巾を肩に置

き、手には藍がきを持つ。花染は、紅花で染めた朱色である。あなたへの熱き思いが朱色となって表出される。

3.1.4 深く染め上げた紺地の琉球絛：深い愛を象徴している。

3.1.5 ここでの三重城（港）：人しれず愛人を送る女のちぎれるような思いを受け止める場の設定は、一層の美的効果を生み出している。

3.1.6 後段の「述懐節」：やりきれぬ淋しさを表す名曲のひとつである。曲にのせて藍傘が開き、遊女の内面の思いを劇的に表現していく。深い悲しみの中でなお、凜と咲く、諦観にも似た強い意志が感じられる。

3.1.7 感情表現に求められたもの：琉球絛であり、手巾であり、藍傘である。衣装や、小道具は、それがなくては、踊れないといっても言い過ぎではない。

3.1.8 かもじ：琉髪より大きめの、粋なからじ結いである。からじ結いには、大きさや高さ角度など何通りもあり、結い方で身分がわかる。

3.2 「諸屯」(図2)

次に古典女踊りである「諸屯」を例にして、衣装の色彩や文様が表現する文化の伝播について地理的背景、及び歴史的背景から考察してみる。「諸屯」は以下の要素で構成される。

- (1) 衣装：鼠地に松、藤、水鳥、菖蒲、籠文様の紅型
- (2) 演出小道具：朱足袋、銀製の房指輪（魚、鳥、蝶、葉、扇などがデザインされた7つが房となって指輪についている）
- (3) 髪型：かむろに結う
- (4) 髪飾り：前中央に椿の花を、のし、ばさらは両側に挿す。額には、紫の長巾を締めて後頭部から背へ垂らす。
- (5) 琉歌：

思 事の有ても よそに語られめ
面影と連れて 忍で挿ま

(仲間節)

枕並べたる 夢のつれなきよ
月や入下がて 冬の夜半

(諸屯節)

別て面影の 立たば伽めしやうれ
馴れし匂い袖に 移ちあもの

(しやうんがない節)

・琉歌の意味

『仲間節：たとえどんなにあなたの事をお慕いしても、この思いを他人に語る事はできません。あなたの面影を抱きしめながらそっと忍んで会いに行くのです。』

諸屯節：愛しいあなたと枕を共にした夢からさめた時の無情なこと。すでに月は西に傾き、冬の夜半です。

しゅんがない節：別れて後、もしもわたしの面影が立つのならば、この着物をそばに置いてください。慣れ親しんだ私の匂いは着物の袖に移してありますから。』²⁾

これらの各要素の意味するところを、地理的な事情、及び史書に見られる記載を基に論じてみる。

3.2.1 色彩：古典女踊りの衣装は、紅型の上着の地色がちがうことと、その文様が少しちがう程度で、様式化されている。ここでは、中年の女性の誰にも語ることのできない恋を表現するので、鼠地か浅葱地となる。あさぎには、浅黄と浅葱がある。浅葱は、葱の芽の萌え出たときの如き色で、淡い藍色のやや黄味を含んだ色である。

3.2.2 着装：下は女子壇輪像にもみられる襷スカート（裳）の形をしたかかん（裳）、上は、筒袖の朱色の胴衣、その上に裾を引く紅型の綿衣を着ける。

「前つむり」といって、裾を引く紅型の綿衣を前でつまみ入れる着装である。紫の長巾（巾）を腰で締めて後、綿衣を上から着け、襟先を長巾の結び目で下から引き上げるようにして着付ける。段差をつけて結んだ紫の長巾は綿衣の前へと垂らす。すなわち、琉球文化を象徴するように紫の長巾が額から背、腰から前へと流れるのである。

こうしたかかん、胴衣、そして、男子壇輪像にもみられる耳の両側に垂らす美豆良（髪）は、後述の椿同様、いずれも明らかに中国の影響を受け

ている。

琉球舞踊は、後姿でも踊る。後方を見せ、両の手の広袖を広げた様、その紅型の文様はまるで桃山、江戸初期の派手好みの時代の様相を呈している。つまり、派手好みの伊達に通ずるものである。

3.2.3 松に藤：この紅型に使われた‘松に藤’の文様の意味するところ、さらに、長巾に紫が使われた理由を解明することとする。

「枕草子」の中で、‘めでたきもの’として、「……色あひふかく、花房長く咲きたる藤の花の、松にかかりたる。……花も糸も紙もすべて、なにもなもの、むらさきなるものはめでたくこそあれ。むらさきの花の中には、かきつばたぞすこしにくき、六位の宿衣姿のをかききも、紫のゆゑなり」とある。⁴⁾

枕草子の頃、花房長く咲いた藤の花が松にかかった様はりっぱなものであったのである。

3.2.4 紫の意味するところ：紫もめでたきもの色として扱われていたことがわかる。六位の蔵人は、紫の指貫をはく。制度化された後にもつ紫の色に対する気分象徴である。

3.2.5 助六の紫のはちまきと琉球舞踊の紫の長巾(図3)：歌舞伎十八番「助六物」は、当時の伊達男の風を舞台に伝えている。江戸初期から元禄にかけて、伊達な風俗が表れる。「このはちまきのご不審か……ではじまる浄瑠璃に、『この鉢巻きは、過ぎし頃、由縁のすじの紫の初元結いをまき初めし、初冠のまつのはけきすき額つつみ八町風そよく、草に音せぬ塗りばなを一ツ印籠一ツまへ、二重まはりの雲の帯、富士の筑波の山合ひに、袖ふりゆかし君ゆかし』新造命をあげまきのこれ助六の前わたり風情なりける次第なり」⁵⁾

この助六の紫の鉢巻きと長巾、かむろの髪飾りにある‘ばさら’と伊達の源流である‘ばさら’の極めて派手な大模様がびったり重なる。琉球文化と江戸文化との接点があったとみなすことができる。また、伊達の好尚と琉球の好みがよく似ている。

3.2.6 琉球文化と江戸文化の美意識：

【この後、明和の頃より、裏模様流行出で底至

りやらん心もちにて、……それより紅裏はすたり、紫裏、模様裏などつけて、伊達に著ることになりたり。……】⁶⁾

そして、江戸では、伊達の美意識は、‘底いたり’の心持ちとなり、それは、江戸末期の‘粋’への好尚へと通じていく。

しかし、粋好みであった茶色の呼び名が江戸にも琉球の資料にも残ってはいるが、琉球の好みにはならず、消えていったのであろうと思われる。

沖縄の古い資料としては、御用布の染織を取り扱っていた納殿という役所が「染賃例」(1736年)を出している。それには、色名と染料が書かれている。閲覧を禁じられているので、直接見ることはできなかったが、式場隆三編「琉球の文化」には、次のような記述がある。この「納殿染賃例」より「色名をひろいあつめてみれば、みる茶、かばいろ、…、こい茶、くり梅、すすたけ、とびいろ。」⁷⁾ これらの茶の色名は、まさに江戸の粋好みの茶色である。

また、同書に、大和の染色の名を教え、そして、琉球の人々にその色の感覚を与えたのは、薩摩の酒匂友寄が初めてであろうと「美濟世采圖」(1632年)にしたためてあると記述されている。これも、直接あたることはできなかった。しかし、琉球の人々が、伊達の源流である‘ばさら’から‘伊達’、‘底いたり’、‘粋’の好尚への一連の流れをつかんでいたことは、これで認められる。

3.2.7 椿：亜熱帯気候である沖縄には、椿の分布が少ないのに、何故、前花に椿をおいたのであろうか。植物図鑑によれば、沖縄では、椿より山茶花の方が広く分布しているとある。「海石榴市の八十のちまたに立ち平し 結びし紐を解かまく惜しも」(「万葉集」巻第十二⁸⁾)

奈良、平安の時代は、椿の長寿・延命を好んだ。‘難海路を運ばれた柘榴のような実のなる木’の意味から、‘海柘榴’と書かれ、‘つばき’の訓がある。唐の時代、厄除けの魔力をもつと信じられており、船に椿を積んだものと思われる。

中国の册封使のもてなしをする際、その国で吉祥とされている文様なり、花を使うのは、自然な

ことである。

やはり、これは山茶花ではなく椿である。椿は、その種類と数が多い。前花に使われた椿は、ヤブツバキであると考え。ヤブツバキなら、琉球にも分布している。

なお、本報は「第49回日本衣服学会年次大会」の発表をもとに論じた。

さいごに、本研究に際しまして、ご助言いただきました玉城昭子氏、宜保美恵子氏、写真を提供された踊り手の我那覇満子氏(「花風」)、安仁屋智永子氏(「諸屯」)に謝意を表します。

引用文献

- 1) 新城徳祐；干支入琉球歴史年表，17(1979)
- 2) 宜保栄次郎監修；琉球舞踊；沖縄県文化振興会，75，41(1995)
- 3) 小林秀雄；新訂小林秀雄全集，9，私の人生観，新潮社，東京，281(1983)
- 4) 池田龜鑑，岸上愼二，秋山虎 校注；日本古典文学大系，19，枕草子 紫式部日記，岩波書店，東京，136(1973)
- 5) 新井登美子，久保田恵子；近世にあらわれた日

本の茶色，日本女子大学家政学部被服学科 新第21回卒業論文，10(1971)

- 6) 市島謙吉；燕石十種，No.1(賤のをだ巻)，國書刊行會，212(1907)
- 7) 式場隆三編；琉球の文化，榕樹社，270(1995)
- 8) 高木市之助，五味智英，大野晋 校注；日本古典文学大系，6，万葉集，3，12，岩波書店，東京，279(1973)

参考文献

- ・比嘉 敬；沖縄大百科事典上，中，下，沖縄タイムス社(1983)
- ・宮城信治；琉球舞踊—鑑賞の手引き—，沖縄県(1985)
- ・沖縄県商工観光部県民文化課；沖縄文化の源流を考える，沖縄県(1983)
- ・渡辺武，塚本洋太郎；花と木の文化 椿，家の光協会(1980)
- ・池原直樹；沖縄植物野外活用図鑑第6巻，山地の植物，新星図書出版(1979)
- ・田中俊雄，田中玲子；沖縄織物の研究，京都紫紅社(1976)



図1 藍傘を手に、肩には花染手巾を、…「花風」



図2 「三日目」で思いをあらわす「諸屯」



図3 額には紫の長巾、かむろ前方中央に椿、左右には、“ばさら”